

江東の樹木 ④

亀戸天神の藤

江東区深川江戸資料館



『絵本物見岡』上 鳥居清長画 天明5年刊

亀戸3-6-42の亀戸天神社は、江東地区の代表的な神社のひとつであり、観光スポットとしても有名です。学問の神といわれる菅原道真を祭神としているため、受験の成功を祈願する人々でシーズンにはたいへんな賑わいをみせています。年に一度行われる「うそ替え」の神事は、江戸時代から続く興味深い行事です。また、梅の花、藤の花が有名で、その花盛りにはたくさんの観光客が訪れています。

藤を辞書で引いてみると、「マメ科のつる植物。花の色は、紫、うす紫、白、ピンクなど。花の時期は4～6月。ふさの長さは30～90cm」とあります。亀戸天神社は、江戸時代からの藤の名所です。江戸時代の藤は、現在も境内にたくさん植えられている藤色の藤ではなく、「土用藤」「夏藤」とよばれる花の時期がもっと遅く、棚のいらぬ種類のものとする説もあるのですが、多くの浮世絵に描かれた江戸時代の亀戸天神の藤は、房になっていて、現在のと同じ姿です。

亀戸天神社の創建

亀戸の地は、天智天皇4年(665)の伝承をもつ香取神社に代表されるように、江東区で最も古くからあったとされる土地です。亀戸には、大永2年(1522)創建の普門院、中世の創建と伝えられる常光寺など江戸時代以前の寺社が集中しており、古くからあった土地であることを裏付けています。このような歴史をもった亀戸に、有名な亀戸天神が創建されるのが寛文2年(1662)のことです。翌寛文3年には神殿、反橋、心字池など、すべて太宰府天満宮に模して造られ完成をみたと伝えられています。江戸に幕府が開かれて60年ほどたった4代将軍の時代のことです。

江戸中期の庶民と名所めぐりの隆盛

江戸時代中期以降になると、江戸の町人たちにも経済的な余裕が生まれてきます。近江や伊勢から来て江戸で栄えた豪商たちと肩を並べて、生ま



『菅公一千年祭 亀戸天神社』3枚続のうちの一枚
延一画 明治35年

れも育ちも江戸という江戸っ子の商人達が台頭してくるのが、宝暦から天明（1751～1789）のころです。この時期、木場の材木商などに代表される江戸生まれの商人達によってさまざまな文化現象が興りました。江戸っ子という言葉が生まれてくるのもこの時期で、上方文化の移入ではない江戸独特の文化が開花した時期といえます。「行動文化」と表現されるそのなかの1つに、名所めぐりの隆盛がありました。日帰りの行楽にでかけ、御利益で名高い寺社や史跡や花、景勝地などをたずね歩き、付加価値としての名物料理や菓子を楽しむというものです。江東の地は、徒歩や水路の利用で日帰りの行楽には格好の距離であり、鄙びた郊外の風情もあり、多くの名所がありました。亀戸天神社の藤は、このような花と寺社の組み合わせた名所のひとつとして注目されます。

江戸名所のガイドブックと藤

宝暦～天明期（1751～1789）を江戸独特の庶民文化の開花期とすると、文化～文政期（1804～30）は、その爛熟期といえます。この時期、江戸名所めぐりの手引書がいくつも刊行されています。その代表は、神田雉子町の名主齋藤月岑によ



現在の亀戸天神社 心字池



現在の亀戸天神社 太鼓橋から社殿をのぞむ

て編纂された『江戸名所^{ずえ}図会』と『東都歳事記^{とうとさいじき}』です。前者は文字どおり江戸市街と郊外の名所の絵入りの案内書、後者は前者とほぼ同範囲の地域の年中行事や季節の風物の案内書です。両者とも亀戸天神の藤を大きくとりあげています。いつ頃から藤の名所となったものか触れていませんが、立夏から12～13日目に見頃となる心字池端の藤の華麗さと見物の人々の賑わいが描かれています。この情景は、安藤広重をはじめとする多くの浮世絵師によって美しい色使いで描かれ、その様子を今に伝えています。藤棚の下には連歌や俳句の会もくりひろげられ、文人墨客が集いました。

なお、『東都歳事記』には、江東区内の藤の名所として、亀戸天神と並んで、砂村大智^{おおち}稲荷の境内が挙げられています。江戸東郊の江東地域に鄙びた田園の情緒の残る花の名所が多かったことがわかります。

参考文献

『江東区史』1997年 江東区総務部

『江戸の名所と都市文化』鈴木章生著 2001年 吉川弘文館

『学研の図鑑 花』1999年 (株)学研研究社